

漱石作品「女」の分岐点

Junko Higasa 2014.6.3

「女」という存在は、元来どういうものであったのだろうか？

まず西洋の創世記では、アダムの骨から生まれたこと自体、女は男の一部である。日本の旧石器時代、体力のない女は狩りが出来ないので、生存の食糧確保を男に委ねた。以来、洋の東西を問わず、男中心社会で、女は常に男の従属物のように扱われてきた。

女という文字を分解すると「くノ一」と云われるが、忍者は男の家来である。「夫人」という文字は「夫の人」で、**woman** の語源は **wife man** で、やはり男の従属物である。女は独身時代には長(父)に従い、嫁いでは夫に従うのが当然の世の中であった。その観念を打ち破ったのが、イプセン『人形の家』である。漱石はその作品に痛く心を奪われた。そしてかつての女の美德喪失を嘆きながらも、時代変遷を受け入れた。その分岐点が『三四郎』である。

漱石は、夫に従属しながらも精神の美德を保った母や嫂への思慕と、憲法発布前の女の体制を、広田先生の夢の中へ見送った。そして美禰子の「迷羊」の言葉によって女を「**woman**」から「**human**」にしたが、同時に形容詞「**human**」の「人間らしい」自然な振舞いを、新制女に求めることも忘れなかった。

時代は移る。漱石作品も移る。『それから』以降、漱石は、文明という利器の御蔭で人間らしく扱われるようになった女の浸食を防いで共存する男を描く。